

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査 明星大学 教授 高島 秀樹
副査 明星大学 教授 佐々井利夫
副査 明星大学 准教授 廣嶋龍太郎
副査 九州大学 名誉教授・
放送大学 名誉教授 住田 正樹

申請者氏名 大友 晃 (13SK1002)

論文題目 昭和初期農村小学校に於ける郷土教育の展開

—齋藤富の郷土教育論と実践及びその今日的意義の究明—

本研究の研究主題は、昭和初期に隆盛を見た「郷土教育論」について究明することである。本論文は「第一編 齋藤富の郷土教育論とその実践展開」、「第二編 齋藤富の郷土教育の今日的意義」の二部から構成されている。

第一編においては、数多くの郷土教育論・郷土教育実践の中から宮城県伊具郡丸森尋常高等小学校・宮城県名取郡中田尋常高等小学校訓導・校長を歴任した齋藤富の郷土教育論・郷土教育実践を取り上げて詳細な検討を加えている。

第二編においては、昭和初期に隆盛をみた郷土教育論が第二次世界大戦後に新設された「社会科」、さらに近年開設された「総合的な学習の時間」にどのように受け継がれているかという観点からその今日的意義について検討を加えている。

この構成からも理解されるように、本研究は単なる教育史的研究であるにとどまらず、その継承や今日的意義について検討していることから、現代の教育実践に対する示唆を得ようとしている点で実践的な意図も持たせることを目指した研究である。

本論文における研究方法は、教育史的研究であるところから文献研究・史料分析が全てであるが、多くの文献・資料の発掘に努め、詳細で公正な検討・分析を行っていると思われる。

本研究における研究内容は、「第一編 齋藤富の郷土教育論とその実践展開」においては、初めに昭和初期に隆盛をみた郷土教育論の背景として、①社会的背景については昭和初期の不景気とそれに対応しようとする農業・農村再建の運動(農村更生運動)、②教育政策については政府・文部省(当時)の郷土教育推進政策、③理論的背景については入澤宗寿の「文化教育学」・「経験主義(体験に基づく教育)」と、それに基づいて教育実践を行った山崎博(神

奈川県川崎市田島尋常高等小学校校長)の郷土教育論・郷土教育実践、④先行する郷土教育については宮城県における師範学校等における郷土教育を取り上げて幅広い視点から検討を行っている。第一編の中心となる齋藤富の郷土教育については、初めに「郷土教育論」について、その基礎としては児童生活の発展・拡充を理論的支柱に据える大正新教育による児童本位の生活教育論に立脚するとともに、農村振興を強く意識したものととらえている。さらに、その独自性を持つ児童観・児童発達観を出発点として、教材の選択・決定から「学習内容論」を、自己活動論と直感的学習論から「学習方法論」を、体験を学習構成論・学習過程論・学習目的論に類別して検討することから「学習構築論」を究明し、齋藤富の郷土教育論の全容を明らかにしている。次に「郷土教育実践」については、丸森尋常高等小学校においては「児童本位の学習」を展開したこと、中田尋常高等小学校においては都市近郊農業の発展を促す地域的特性形成に資するものとしての「特設郷土科」の開設とそのカリキュラム構築を行ったことを中心に明らかにしている。その結果として、①学習目的を明確化し、合目的的学習内容の選択を行った、②学習内容の系統性を重視した、③学習内容や学習方法において郷土振興を重視したことをその独自性として示している。これらの検討過程においては、齋藤富の著作や実践記録を中心に広く文献・史料を渉猟し、十分に明らかにしていると高く評価することができる。

「第二編 齋藤富の郷土教育の今日的意義」においては、第二次世界大戦後の教育改革の中で登場した社会科(本論文では「初期社会科」と表記されている)と2001(平成13)年度に新設された総合的な学習の時間を取り上げ、齋藤富に代表される郷土教育の考え方との関係、継承された点・継承されなかった点等について検討を加えている。初期社会科については今井誉次郎を中核とする東京都西多摩郡西多摩小学校の実践を代表例として取り上げ、総合的な学習の時間についてはいくつかの実践例を取り上げている。三者の比較検討の結果として、基本的には児童の主体的、探究的学習を保証するために学習方法の中核に問題解決学習を据える実践という点で、郷土教育と初期社会科、総合的な学習の時間との間には共通性が存在することが明確であるとしている。その上で三者の学習目的、カリキュラム構成(教材選択の原理、内容構成の原理)、学習方法について具体的な比較検討を行い、その結果、①学習目的の構造においては知的側面と実践的側面を設定している点で三者は共通していること、②カリキュラム構成のうち教材選択の原理においては郷土に即した具体的なものを選択している点で三者は共通していること、内容構成の原理においては児童の発達段階を基礎とする点では共通しているものの中田尋常高等小学校における郷土教育には郷土理解の多様性があること、③学習方法においては問題解決学習の考え方を取り入れている点で三者は共通していることの諸点を示し、これらの点から郷土教育から今日の教育にまで受け継がれている点があることを示している。第二編において初期社会科、総合的な学習の時間との比較検討を行ったことは本研究の独自の視点であるが、その記述内容については郷土教育についての再提示と理解される部分が多く、初期社会科、総合的な学習の時間についての検討、解明についてはさらに充実しうる余地がある。

特に、第一編と第二編の関係が不分明となっている傾向がある。これは第二編が、郷土教育論と第二次世界大戦後の教育実践との継承・不継承という関係について明らかにすることを意図するのか、第二次世界大戦後の教育実践と比較することを通して郷土教育論の今日的意義を明らかにすることを意図するのか、研究者の意図が明確に理解しがたい点に起因すると考えられる。それ故、第二編における考察・結論が必ずしも十分に明示されていないという研究上の限界があると言わざるを得ない。第一編と第二編の関連が明確になれば、さらに論文としての意義が明確になると考えられる。しかし、この点については本論文に示された研究成果を基礎として、今後、さらに研究を進展することが期待される。

よって、本研究は博士（教育学）の学位を授与するに十分価値あるものと認める。

2016年2月6日に全審査委員による論文についての口頭試問ならびに総合的な面接を実施、2016年2月27日に公聴会を実施、それらの結果を総合的に勘案し、慎重に審査した結果、審査委員全員一致で合格と判定した。